

【8】考察と今後の課題

コミュニケーションの力を、その場だけの「やりとりの力」と見るのではなく、生活上の課題を解決する方法を学ぶ基礎となる力であり、豊かな心情を育てる上でも不可欠な力と捉え、生活一般・課題学習・職業科などの各場面を中心に研究実践を行ってきた。

特に、昨年来の検討課題となっていた生活一般と課題学習との関わりについては、その単元間の関連や構成を工夫した「授業づくり」が展開された。これらの授業の中では、自らの障害を認め、その克服に積極的に立ち向かう姿勢が生まれつつあり、将来の社会参加にあたっての基礎的な知識への理解がすすんだ生徒が見られるようになった。また、青年期における発達の特徴でもあるが、指導者の意図的な教材配置もあって、自己確認・自己評価の力も育ち始め、「自分づくり」の課題に向かって確かな力が育ちつつある。

職業科では、社会参加を前にした高等部の生徒にとって「働く」ことを学び、自らが社会と関わる意欲を育てる重要な場と考えてきた。しかし、コース制の時間や校内職業実習・現場実習の期間を、必ずしも十分確保できたとは言い難い中での取り組みとなっている。それだけに、授業づくりの面でその準備と学習内容や教材の配置を充実させ、多様なものとなるように工夫してきた。

その結果、作業態度の向上はもとより、主体的・意欲的に「労働」に取り組む姿が芽生えてきている。また、生徒たちなりに社会から要請されているものがどんなものなのかを感じ取り、その要請に応えての自己実現に向かって、自分像をふくらませ、社会の一員として立派に生き抜いていこうとする生徒も見られるようになってきた。なお、特に職業科の学習の中では、指示を正確に理解（受容する力）したり、自分の仕事の状況を報告（伝達する力）したりするというコミュニケーションの課題が問われる場面が多いが、この面で着実に成長してきている生徒が多くなってきた点も評価できる。

しかし、この研究実践をしめくくるにあたって、次のような点が今後の課題としてあげられる。

- (1) 教科・領域間の関わりを一層深化させるための検討と、指導者間の連携を強める。
- (2) 学習した内容や知識が実際の生活の中で、実践的な力として定着するように指導を強化する。
- (3) 社会や周囲の人々との関わり場面を多様に経験させ、その中で自己客観視の力を高めさせる。
- (4) 日常生活の指導を強め、社会生活を送る上での基本的な知識の理解や行動様式の定着を図る。
- (5) 生徒個々の課題に対応した教材の配置と学習展開の中での工夫を継続し、努力していきたい。

なお試案として作成した「発達に応じたコミュニケーション指導内容表」(P181参照)については、今後も指導場面で個に応じて実践的に活用していくこととなる。

コミュニケーションに関わる生徒たちの生活環境や諸条件は、決して恵まれた状況にあるとは言えない。特に、地域や家庭での対話の少なさは、その力を育てる環境とは程遠いものがある。また知的障害そのものが、コミュニケーションの基本となる「受容する力」「伝達する力」の習得において大きな克服の課題でもある。それだけに、家庭と連携を図りながら、社会参加のための条件整備を求めた地域社会におけるネットワークづくりをすすめながら、生徒個々の力を一層高めていく必要があると考える。